学びの風便り

リーディングスクール通信６４　R8.6.30(火)

みんミラ

発行：松本市教育委員会　教育研修センター

学びの改革のあゆみ　みんミラ ラボ１・中山小学校

第１回みんミラ・ラボ　～ 対話で育む学校の挑戦 ～

6月 22 日（月）、松本市勤労者福祉センターにて第１回みんミラ･ラボが開催されました。当日は、市内全小中学校から 138 名の先生方が集い、各校が取組む「みんミラプロジェクト」をテーマに、軽井沢風越学園で開発された「チューニング」（プロジェクト等の検討手法）を活用して 22 ブースで対話を深めました。

今回のラボの目的は、次の2点です。

①自校の計画を見つめなおし、今後に向けての意欲を高める
②他校の実践を知り、新たな気づきを得る。

冒頭では堀内指導主事が、チューニングの意義と 29 分間のロードマップ、各ステップの内容･留意点を丁寧に説明。続いて発表者は「自校の取組の成果･課題･一緒に考えたいこと（問い）」を簡潔に示し、参加された先生方は、その思いに寄り添いながら、当事者意識をもって自分の言葉で思いを交流し合いました。

ブースには校長･教頭･研究主任･専科教諭などさまざまな立場の先生方が参加していましたが、役割を超えてフラットに楽しそうに語り合う姿が印象的でした。１回目のチューニングを終え、2回目になると、先生方の言葉はより洗練され、交流はより豊かに広がりました。会場は「各校のチャレンジのすばらしさ」や「その意味」を自ら見出そうとする熱意と、「みんなで場を創り上げよう」という温かい雰囲気に包まれました。発表者参加者ともに自分事として考え語り合う「チューニングのよさ」、「対話の大切さ」を実感する場となりました。

ラボの様子に接していた曽根原教育長は、**「先生方が互いの実践を共有し合うことで、それを楽しそうに話し合っている様子がとても嬉しかった。刺激をもらい、また自分の学校に戻ってがんばろうと、お互い高め合おうと思っていただければ、そんな先生の姿は素敵ですね」**と話されました。

【参加者からのリフレクション】

〇１セット３０分と決まった時間の中で頭をフル回転させながら、自分の考えを言語化していくのが難しくも楽しい作業だと感じました。チューニングを学校でも取り入れてみたいです。

〇チューニングを自分の学校でもやってみたい。自分の「問い」を仲間が考えて話し合ってくれているのをメモしていると、解決の「答え」がなくとも「糸口」になるものは見えてきて、おもしろいと感じた。

〇発表者の先生が持っている「問い」は、私自身も少なからず課題に感じていることと重なるところが多く、新たな気づきが多くありました。…「うちの学校だったら…」という視点をもって見てくること、新しいつながり作りの場と捉えること等、私の中にはなかった考え方と出会うことができました。

〇職員間で「主体的な学び」とはどんな子供の姿だろうといった語り合いを行い、子供の姿を中心に考え合う機会を設けることの大切さを改めて感じました。各校の研究主任の先生方が熱量を持って自校の研究について語る姿に、とても感銘を受けました。

〇チューニングを職場でどう取り入れたらいいか、ラボの帰り道に車で話題になり、共有できたことで、これからのチャレンジにつながりそうです。やはり一人で参加するより、３人程度で共有できていれば、実現度が上がると思います。忙しい中ですが、その提案がありがたかったです。

〇対話は非常に重要であると改めて感じた。…各校から様々な立場の先生方が集まって、対話をする今回のような機会があったからこそであると感じた。対話することでより深く実践を見つめなおすことができ、アドバイスもたくさんいただけた。今日の２時間でもそのよさを感じることができたので、自校の先生たちと対話を重ねることで、よりよい集団作りにつながるのだということが改めてわかった。

中山小学校　―子どもとともにつくる体育フェス―

中山小学校では今年度、これまでの運動会を「体育フェス」として位置付け、4～6 年生の子どもたちが企画の立ち上げから準備、本番、振り返りまで関わるプロジェクトに挑戦しました。

大切にされたのは、行事の一部を子どもに任せることではありません。どんな体育フェスにしたいのか、誰を巻き込みたいのか、そのためにどんな活動が必要なのかを、子どもと教師がともに考え、つくっていくことでした。そこには、「子どもが学校をつくる当事者になる」という願いがありました。

願いから始まるプロジェクト

プロジェクトは、子どもたちの願いを集めるところから始まりました。実行委員を中心に、4～6 年生が「どんな体育フェスにしたいか」を考え、その願いをもとに「動かし隊」「盛り上げ隊」「広め隊」「伝え隊」などのチームに分かれて活動しました。

例えば、「動かし隊」チームは、保護者も巻き込む全校種目を企画しました。はじめは、小さな子どもから高齢の方まで参加できる形を考えましたが、実際にルールを検討すると、説明の難しさや安全面の課題が見えてきました。そこで、教師と対話しながら方法を見直し、保護者を子どもたちが誘いに行く「お誘いタイム」を取り入れました。整った企画にすることだけでなく、子どもたちの中にある願いを受け止め、どうすれば実現できるかを、ともに考えることが大切にされました。

葛藤を対話で越えていく

もちろん、すべてが順調だったわけではありません。先生たちは、子どもにどこまで任せるのか、どこで支えるのか、迷いながら進んでいきました。たとえば、全校種目の司会進行では、教師がシナリオ案を用意しました。それは、子どもたちが安心して本番に立ち、自分たちで言葉を加えたり、場に応じて動いたりするための足場かけでした。職員室では、常に「ここは支えた方がいい」「ここは待ってみよう」と、先生同士の対話が重ねられました。

プロジェクト主任の関先生は、「教務主任の佐藤先生をはじめとする先生方と相談することで進めることができた」と語ります。宮田校長先生も、先生たちが見通しの持てない中でも不安にとらわれず、「やってみれば、子どもたちから何かが出てくる」と信じて進んでいたことを価値づけていました。子どもとの対話、先生同士の対話が、このプロジェクトを前に進める力になっていました。

本番で見えた子どもの育ち

準備や本番では、子どもたちの育ちが随所に見られました。読むことに苦手さのある子が、実況チームに自ら立候補しました。周りの友だちがそっと支え、その子はアナウンスに挑戦しました。また、これまでリーダーシップを発揮する場面が多くなかった子が、仲間に声をかけながら活動を進める姿もありました。自分のやりたいことを貫いた子、保護者を一生懸命誘いに行った子、種目紹介に挑戦した子。体育フェスには、一人ひとりの子どもにとっての物語がありました。

次のフェスへつながる一巡目

中山小学校の先生たちは、今回の体育フェスを子どもたちにとっての「探究の一巡目」として位置付けています。願いを持つ。仲間と企画する。試してみる。うまくいかないことに出会う。対話しながらつくり直す。本番で実行する。そして振り返る。体育フェスで子どもたちは、この一連のサイクルを経験しました。その経験は、すでに次の音楽フェスへとつながっています。

葛藤しながらも対話を重ね、子どもの願いを信じて進んだ先に、子どもたちの確かな育ちと先生たちの手応えが生まれています。